
Dear 樹莉

Jessamine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear 樹莉

【Nコード】

N4529BA

【作者名】

Jessamine

【あらすじ】

あたしは常に一位でいたい。周りの人達よりも上を行きたい。だって、そしたら少し変なところがあったって認めてもらえるんだもの。ほら、何でもできる子が変わってる方が、馬鹿な子が変わってるより全然良く思われるでしょ？

樹莉は三年振りに日本に帰ってきて、新しい高校生活が始まった。
しかし…

樹莉は自分の部屋の全身鏡の前に立ってみた。そこには紺色のセーラー服に身を包んだ自分が立っている。真新しいその制服が今の自分の沈んだ気持ちと不釣り合いで、小さな溜息が漏れてしまった。

やっぱり日本って制服着るんだよね……あっちにいた頃は私服だったのに、ずっと…

まさか自分がセーラー服を着ることになるとは思わなかった、というのが樹莉の本音だ。日本へ帰ってくることになるなんて、あの時の自分なら想像すらしなかった。いや、むしろあまり想像しにくかった。

時計をちらつと確認するともう七時で、最後にリボンやスカート丈などの細かいところを整えてから鞆を肩にしょって家を出た。

樹莉の父親は、血が繋がっていない。彼女が小2に上がる頃に母親がアメリカ人と再婚したからだ。

新しいお父さんと距離をどうやってとればいいのかなかなかわから

ず困っていたのを覚えてる。

その再婚のおかげで、名前も姫島樹莉からヴェニゼロス樹莉に変わってしまい、クラスの中では浮いた存在となってしまうた。

もともと自分は普通の、むしろ人気者な生徒であったのにいきなりの転落。樹莉はそれを成績優秀な優等生になることでカバーするようになっていった。

むしろ、名前が少々変わっていてもあたしはこんなに出来る生徒なんだ、みんなに認めてもらえるんだ、という自分の心の支えにしていた。

それが、樹莉の常に一位であることへの執着に繋がっていったのだった。

常に一位であること、それが彼女のモットーだ。成績はもちろん、体型もなにもかも、自分の努力で変わることならば全てトップであること。他の人達の上を歩き、認められる存在でいること。

そんな価値観がいつのまにか彼女に浸透していった。

そして樹莉がちょうど中1に上がる頃、母親の仕事の転勤でアメリカのニュージャージー州に移ることが決まった。

英語は出来るようになった方が良いという両親の教育の方針で、日本人学校ではなく現地の中学に通うことになった。英語に苦労しながら毎日を過ごしたが、三年も経つ頃にはかなり自由に話せるようになって友達も増えた。もともと樹莉の苗字は英語だし、なにより樹莉がそこでも優秀さを発揮したために、浮くこともなく周りに溶

け込め、更に尊敬の目で見られた。

毎日が楽しくて、学校へ行くのも苦ではなくなってきた頃、樹莉が高校へ上がる半年前の三月に、母親に日本の本社へ戻る辞令がくだり帰国することになったという訳だ。

樹莉は電車に揺られながら、これからのことを考えてみた。

みんな、あたしのことどう思うだろう。いくら高校の新学期で互いのことをまだ知らないとはいえ、この苗字は目立つんだよなあ……それを思うと小学校のあの頃を思い出す。

突然名前が不思議な苗字になった樹莉を、好奇心を持って見てくる目。

ニュージャージーにいた頃は全然みんなも普通に接してくれて嬉しかったのになあ……また同じことを経験するのかなあ……

ポーツと考えるとまただんだんと憂鬱になってきた。

ふう、と今日二度目の溜息をついたところで電車が到着し、他の乗客に紛れるようにして降りていった。

1・(後書き)

注意：アメリカでは新学期は九月ですので、半年前は三月に当たります

駅から、この前覚えた道順の通りに歩いていると、ちらほらと同じような制服の人達を見かける。

この人達みんな一緒の学校かな

と思っていたら、突然後ろから一人の同じ制服を着た女子生徒が走ってきて、追い越していった。

通り過ぎた時にちらっと横顔を見ると、はしゃいだような表情をしていた。

あれ？ 何かあの子……

その横顔にどこか見覚えがあるように感じた。

…まあ、気のせいかな……

でも、高校生になるなんて本当は嬉しいことなんだよね。

と、自嘲気味な笑みがくすりとこぼれた。

一体、どうしてあたしはこんなにもテンションがガタ落ちなんだろう

うか、と分かっているの自問してみたり。

すると突然、さっき追い越していった女子生徒が、樹莉の方を振り返ってじっと見てきた。

な、何？などと思いながら

やっぱり会ったことある人だったかな？と自分の記憶を探っている
と、

『…樹莉？』

え？

次の瞬間、

『ちよ、やつぱり樹莉じゃーん？　しかも同じ制服だし？　ちよつと、これ奇跡じゃん！てゆかなんでここいんの？　いつ帰って来たのよ、全くもう…ね、この同じ高校来んの？あ、制服一緒だから同じかあ』

と、女の子が物凄いスピードで喋りながら、満面の笑みで近づいて来た。

髪は肩につかない程度のストレートなショートカットで、近づいてくるにつれて、右の頬にえくぼがあることと、随分と背が高いことが分かる。

えつと…誰だっけ…と樹莉が脳内で焦っていると、

『ええー、うちのこと覚えてないとか？シヨックだなあ…』

と、女の子が全然シヨックでもなさそうにクスクス笑った。

そして次の瞬間樹莉に爆弾を落とすとした。

『あたし美希だよお、覚えてない？』

美希……美希……

『…………ええっ？ あの美希？ ホントに？』

『んふふー、そつだよ。てゆかそんな驚かなくても』

いやいや、これは驚くに決まっている。といっても嬉しいサプライズだ。まさかこんなところに、しかも同じ高校に美希がいるなんて…

美希、本名藤井美希は、樹莉と同じ私立の女子校の小学校に行っていた樹莉の親友だ。

美希は、苗字が変わっても今までと変わりなく接してくれた一握りの友達のうちの一人だ。

サバサバしていて時々きつい言い方をする時もあるが、何でも話せる樹莉の大切な親友である。

美希との思い出は良いものばかりしかない。

そんな親友が、日本に帰ってきたら同じ高校にいたなんて、驚嘆するに決まっている。

樹莉の今までのテンションの深さが一気に吹っ飛んだ。

『美希、超嬉しいよ会えて？ 久しぶりだね』

『その割にはうちのこと忘れてたくせに』

『……確かに。でもさ、引越した後とか、思い出にふける間もない程色々大変だったんだよ……』

と、樹莉が歩き始めながら言い訳っぽく言ってみた。

美希も樹莉の隣に並んだ。

『まあそうだったろうね。いいよ別に、気にしてないから。』

てゆかそれよりさ、いつ帰ってきたの？』

『んとね、ついこの前の三月。今が四月の頭だから……一ヶ月くらい前かな？』

『え、そんな前？ もお、教えてくれたら色々話したりとかできたのに……』

美希が口を尖らせて不満そうに言った。

『連絡先知らなかったし。引っ越す時間くの忘れたから』

『あ、そっか…。』

それより、あいつもビックリするだろーなあ、樹莉がいるの知った
『ら』

美希がいたずらを仕掛けた子供のような笑顔でふふ、と笑った。

『あいつって誰よ?』

樹莉が不思議そうに聞くと、またもや爆弾が落とされた。

『蓮だよ、蓮。覚えてる?あいつも同じ学校だから』

…蓮？　って、東海林蓮？

蓮かあ……そっか、蓮も一緒なんだ…？

二つ目の爆弾も見事にヒットした。

東海林蓮は、樹莉が赤ちゃんの頃からの幼馴染である。

小学生の間は同じ学校に通ってはいなかったが、幼稚園は同じだったし、小学校の間も結構遊んだりした。

そして何より、蓮も美希と同じく、樹莉の両親の再婚後もずっと仲良くしてくれていた一人だ。

かなりひどい高校生活を想像していた樹莉であったが、すでに心強い味方が二人もいることが分かった。

これは意外と大丈夫：かも？

なんて前向きに思ってみる。

ただ、彼女には、名前以外にも美希と蓮の知らないもう一つのコンプレックスがある。

だが、今はそんなこともあまり気にならないくらい樹莉は高揚としていた。

そしてようやく、樹莉の新生活が始まる場所、

日本中央学園高校

の正門が見えてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4529ba/>

Dear 樹莉

2012年1月14日05時49分発行